

博物館だより

No.31

平成20年11月1日

みやこ町歴史民俗博物館発行
福岡県京都郡みやこ町豊津1122-13
TEL 0930-33-4666
FAX 0930-33-4667

企画展 豊前地方の私蔵書画名品展③

「逸木コレクション」展

Part. II

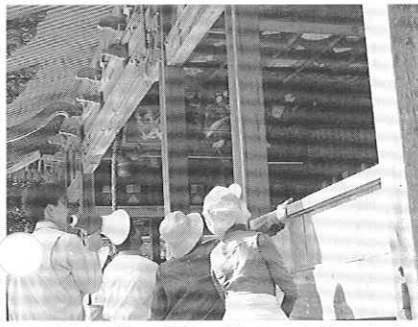
当館では11月26日から企画展「逸木コレクション展Ⅱ」を開催いたします。

当館では平成18年以降数回にわたり、町内在住の蒐集家・逸木俊司さんが永年にわたって収集されてきた数多くの書画や刀剣などを寄贈いただきました。

寄贈された品々はそれぞれが貴重な文物であることは勿論ですが、地域ゆかりの品も多く、立派な地域史資料にもなっているのが

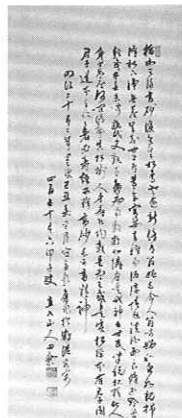
10月の活動記録から

●「身近な文化財めぐり」が好評！
友の会と共催で行った「歴史たんけんウォーク」は身近な文化財めぐりと題し、9月28日に犀川地区、10月12日に勝山地区の史跡をめぐりました。身近な場所の意外な「再発見」に参加した皆さんは感心しきりでした。



▲絵馬や格天井絵が数多く奉納される黒田神社（勝山黒田）

特徴です。
平成19年夏の企画展でその一部をご紹介しましたが、このたびは前回ご紹介できなかった資料群をお披露目いたします。



▲御先（みさき）と呼ばれる鬼が観客席へ降りてきてファンサービス。

●豊前の神楽は大迫力でした！
10月13日、豊前市を舞台に「神楽鑑賞会」が行われました。
豊前市は神楽が盛んなうえ、秋は奉納シーズンを迎えます。その秀逸な体験しようと開かれた鑑賞会。神楽の迫力は勿論ですが、これを支える「地域の力」の素晴らしさも見学しました。

開催期間 11月26日（水）
～12月23日（火）

開催場所 博物館展示室
■観覧料 常設展の観覧料でご覧いただけます。

■主な展示資料

- ・画幅 田能村直入「たのむらちまこぼし」
- ・画幅 守住貫魚「もりずみつらな」
- ・書幅 高浜虚子「たかはまきよし」

▲田能村直入画 高砂尉姥図

友の会バスハイクのお知らせ

「雷山千如寺と伊都国の史跡」をテーマに、晩秋の糸島路をめぐります。ふるってご参加下さい。

■日時 11月23日（日）

■場所 前原市及び志摩町周辺

■参加費 3000円（昼食含む）

■備考

- ・定員となり次第締切ります。
- ・友の会会員以外の方は入会後に参加いただけます。

11月期歴史講座のご案内

【漢詩文講座】

11月1日（土） 9時30分～

【古文書講座】

11月15日（土） 10時00分～

【みやこ学講座】 *座学

11月15日（土） 10時00分～

【古典かな講座】

11月22日（土） 9時30分～

【金曜古文書講座】

11月28日（金） 10時00分～

《古文書解読コーナー》

① 渡航に同じ

② 思いやりの心とめぐみ

③ 建築工事

④ 集まりのある日

⑤ ○○はるばる

⑥

◎ 答え

（反対向きに見てください）

- 日字 ⑤
- 日字 ⑥
- 日字 ①
- 日字 ②
- 日字 ③
- 日字 ④
- 日字 ⑤
- 日字 ⑥

みやこの歴史発見伝 20

遠来の職人たち

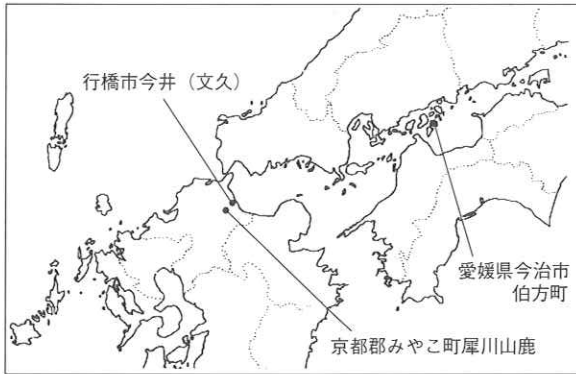
伊予伯方島の石割職人

山鹿村の川土手修理

元治元年（文久四年・一八六四）七月、仲津郡山鹿村（現みやこ町犀川山鹿）を流れる今川の土手が修理されることになりました。修理の箇所は小字「ひんどう」という所にあり、破損の原因は不明ですが、おそらく元治元年五月二八日・二九日（新暦七月一日・二日）、六月一日（新暦七月五日）と続いた大雨が原因と推測されます。元々この破損箇所は、ただ土を築き固めた土手だったようですが、今回の修理では石垣を築き、より堅固なものに仕上げることとなりました。

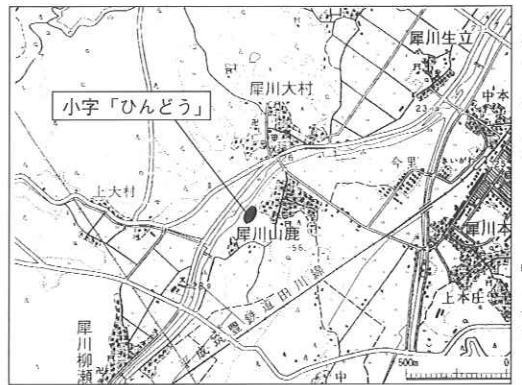
文久新地

ところで、文久元年（一八六一）八月から、仲津郡今井村（現行橋市）地先の海岸で、規模の大きな干拓事業が開始されます。これは、小倉藩の指示にもとづき、仲津郡国作・平嶋・元永の各手水の大庄屋（手水とは一〇数ヶ村程度をまとめた行政区。その長が大庄屋）が地元責任者となって行われた「御用普請」でした。



とは言え、事業の資金は裕福な商人に頼る部分が多く、実際に仲津郡大橋村（現行橋市）の柏木勘八郎・箱屋や上毛郡宇島（現豊前市）の小今井助九郎（方屋）など、領内の豪商が「御用掛」の一員として事業に参画しています。

工事は、文久二年（一八六一）五月九日の潮止め工事、同年八月一五日の唐戸（水門）設置工



（国土地理院二万五千図「豊前本庄」）犀川山鹿の小字「ひんどう」の位置

事の完了と進み、今川からの水利工事に手間取りましたが、元治元年にはほぼ完成したようです。干拓面積は約六二町で、土地は干拓の功労者・出資者・入植者に配分されました。この干拓地の名は、時の元号を冠して「文久新地」と呼ばれるようになりました（現在は略称化して「文久」と呼ばれる）。

伊予石割職人の足跡

実は、この文久新地と、山鹿村小字「ひんどう」の川土手修理には、ちよつとした関係のあることが最近分かりました。元治元年七月に、仲津郡長井手水大庄屋（山鹿村は長井手永に属したが、上役である仲津郡の郡奉行に宛てた願書に、次のようなものがあります（筆者意訳）。



小字「ひんどう」付近の現況（犀川山鹿）

筆申し上げます。山鹿村の「ひんどう」という所の川土手破損所を、このたび石垣にしたと思いますところ、昨年（文久三年）まで文久新地の工事に従事していた伊予の石割職人三名が、再び沓尾村（現行橋市）に来ていたそうです。ついては、彼らを使って石垣の工事をしてほしいので、ご許可ください。」（長井手水大庄屋元治元年日記七月二日条）

この石割職人は作太郎・清吉・佐吉の三名で、伊予の伯方島（現愛媛県今治市伯方町）から来た職人たちでした。この「ひんどう」修理工事の一件以外で、文久新地の干拓に伊予の職人が関わっていたことを示す史料は今のところ見つかっていません。したがって詳しいことは分かりませんが、おそらく、文久新地の「二重石垣」と呼ばれていた



文久の二重石垣 写真提供 山内公二氏

石造りの潮止め堤防は、石積みを得意としたのであろう。彼ら石割職人の手によるものであったと考えられます。既に文久新地の仕事が終わった筈の彼らが、再び元治元年に当地を訪れた理由は分かりませんが、しかし、タイミング良く川土手修理の必要があった山鹿村にとって、遠来のプロに仕事を頼むことができたのは幸運だったことでしょう。

それにしても、文久新地干拓のはじめに、遠く伊予の職人たちと、どのような「つて」で知り合い、どのように連絡を取り合って仕事を頼んだのか、その辺りをぜひ知りたいものです。（川本英紀）